内閣文庫蔵の国史外考と本朝外考について

石原道博

目次

第一　内閣文庫蔵の国史外考について
一　国史外考の体裁（上）
二　国史外考の体裁（下）
三　国史外考の引用書（上）
四　国史外考の引用書（下）
五　小結
第二　内閣文庫蔵の本朝外考について
一　本朝外考の体裁
二　本朝外考の引用書（一）
三　本朝外考の引用書（二）
四　小結

第一　内閣文庫蔵の国史外考について

本稿は、わたくしの『異称日本伝の類書・続編の研究』の序論としての前稿「中国史書日本関係記事の集録につい

て」、および「朝鮮史書日本関係記事の集録について」につづく各論の第一にあたる（註1）。

一　国史外考の体裁（上）

内閣文庫蔵の国史外考というのは、林恕編、全二十三冊、寛文（一六六一―七二）の写本である（註2）。林恕（一六一八―八〇）は春勝。通称の春斎、号の鵞峰でしられる徳川幕府の程朱学者。本書は線装、袋綴、美濃判。外表紙の右上に三字二行の「昌平坂学問所」の押印。全冊おなじ。第一冊と第二冊は有罫、黒口。半葉一〇行・行一七字。

第一冊は、全五九葉。目次（一葉）をふくむ。右下にたて一行の「浅草文庫」、右上に二字二行の「林氏蔵書」、中央上に二字三行の「日本政府図書」の押印。目次は

太祖　洪武　後小松応安　後円融永和・康暦・永徳
太宗　永楽　後小松応永
仁宗　洪熙　後小松応永
―――――――――――――――――――――――――――光厳
後小松至徳・嘉慶・康応・明徳・応永

のごとくであるが、第一行下欄外に「光厳」と加筆してある。応安の年号は、もとより後光厳（北朝）であるから、下欄外の加筆は、おそらくその訂正をしめすものであろう。

1洪武元～三十五年（三五葉）は、各年にそれぞれ一葉をあて、黒口の柱には「洪武元」「洪武二」というようにしるす。因みに、洪武は三十一年、つぎが恵帝の建文が四年あるが、恵帝の在位をみとめず、洪武三十五年としているのが注目される。記述の体裁を紹介するため、たとえば冒頭のくだりをしめせば、つぎのとおり。

洪武元年

十一月、詔諭日本。　従信録○明政統宗、為洪武二年、遣使日本国等、賜璽書○按、御製文集、載諭日本国王詔及設礼部問日本国王之二篇、可幷考○又按、日本求通大明表、出於翁勝野聞、宜考訂之。

堯山堂外記曰、国初嘗欲征倭、其国王遣使嘻哩嘛哈、奉表乞降。上問倭国風俗如何、以詩答、云々

すなわち、出典をしめし、参考文献を引用し、按文をのせるなど、きわめて良心的・学術的である。

2 永楽元～廿二年（二二葉）も、まえにおなじ。ただし、たとえば永楽二十年の条に「冠象山」のように、寇を冠と誤写したところもある。

3 洪熙元年（一葉）

第二冊は全一三二葉。目次（一葉）をふくむ。目次の内容は、つぎのとおり。

宣宗宣徳十年（五葉）　孝宗弘治十八年（九葉）

英宗正統十四年（七葉）　武宗正徳十六年（八葉）

景帝景泰七年（四葉）　世宗嘉靖四十五年（三七葉）

英宗復位天順八年（四葉）　穆宗隆慶六年（三葉）

憲宗成化二十三年（一二葉）　神宗万暦四十二年（四二葉）

いま、まえの第一冊の目次を、第二冊とくらべて、第二冊のようにかきなおせば、つぎのとおり。

太祖洪武三十五年（三五葉）

太宗永楽二十二年（二二葉）

仁宗洪熙元年（一葉）

これを要するに、第一・二冊は、日明交渉編年史の体裁をとっている。

二　国史外考の体裁（下）

第三冊は全六二葉。目次はない。つまり第三冊以下は、その体裁が一変している。和紙は無罫、袋綴。半葉一〇行・行一九字ないし一八字。また半葉八行・行一七字ないし一六字。統一していない。筆跡もことなる。第一、二冊とまったくちがう編集。中国諸書から原文を引用する（引用書については後述）。

第四冊は全六一葉。半葉一〇行・行一九字、また半葉八行・行一八字。全冊、金安国（字は国卿・号は慕斎）の慕斎詩集・慕斎文集（朝鮮書）からの引用。

第五冊は全一九葉。半葉一〇行・行一九字。

第六冊は全五七葉。半葉八行・行一六字、また半葉一〇行・行一九字。

第七冊は全六五葉。半葉一〇行・行一九字。

第八冊は全四七葉。半葉一〇行・行一九字ないし二〇字。また半葉八行・行一七字ないし一六字。はじめに明鮮年代対照表といえるつぎのような表をかかげる（カッコ内と西暦は石原の加筆）。

高　麗

恭愍王十七年（一三六八）当洪武元年

辛禑元年（一三七五）当洪武八年

恭讓王元年（一三八九）当洪武二十二年

朝　鮮

太祖康献王（李成桂）元年（一三九二）当洪武二十五年

恭靖王（定宗）元年（一三九九）当建文元年
太宗元年（一四〇一）当建文三年
世宗元年（一四一九）当永楽十七年
文宗元年（一四五一）当景泰二年
魯山（端宗）元年（一四五三）当景泰四年
世祖元年（一四五五）当景泰六年
睿宗元年（一四六九）当成化五年
成宗元年（一四七〇）当成化六年
燕山〔君〕元年（一四九五）当弘治八年
中宗元年（一五〇六）当正徳元年
仁宗元年（一五四五）当嘉靖二十四年
明宗元年（一五四六）当嘉靖二十五年
今上（宣祖）元年（一五六八）当隆慶二年

右見攷事撮要

あくまで明一代を対象とし、中朝両国の比較に関心をしめしていることがわかる。

第九冊は全五七葉。表（一葉）と本文（五六葉）。半葉一〇行・行一七字。日明年代対照表といえるつぎのような表であるが、これは第八冊の表と姉妹関係といえる（日本年号は原文は二行割、カッコ内と西暦は石原の加筆）。

太祖洪武元（一三六八）後光厳応安元年　八年（一三七五）後円融永和元年　十二年（一三七九）後円融康暦元年

十四年（一三八一）後円融永徳元年　十七年（一三八四）後小松至徳元年　二十年（一三八七）後小松嘉慶元　二十二（一三八九）後小松嘉（康）応元　二十三（一三九〇）後小松明徳元年　二十七（一三九四）後小松応永元年（註3）太宗永楽元（一四〇三）後小松応永十年（註4）　英宗正統元（一四三六）後花園永享（享）八年　六年（一四四一）後花園嘉吉元　九年（一四四四）後花園文安元年　十四年（一四四九）後花園宝徳元（註5）　憲宗成化元（一四六五）後花園（後土御門）寛正六年　二年（一四六六）後土御門文正元　三年（一四六七）後土御門応仁元　五年（一四六九）後土御門文明元年（註6）　武宗正徳元（一五〇六）後柏原永正三年　世宗嘉靖元（一五二二）後柏原大永二年　七年（一五二八）後奈良享（享）禄元　十一年（一五三二）後奈良天文元年　三十四（一五五五）後奈良弘治元年　三十七（一五五八）正親町永禄元（註7）　神宗万暦元（一五七三）正親町天正元年　二十年（一五九二）後陽成文禄元二十四（一五九六）後陽成慶長元　四十三（一六一五）〔後水尾〕元和元年

第十冊は全二八葉。半葉八行・行一七字。また半葉九行・行二〇字、さらに半葉一〇行・行一九字。

第十一冊は全四四葉。半葉八行・行一六字また一七字、ないし一九字。

第十二冊は全五七葉。半葉一〇・行一八字ないし一九字。また半葉八行・行二二字ないし一七字。さらに半葉九行・行一八字。

第十三冊は全二〇葉。半葉九行・行一八字。全冊、朝鮮書からの引用。

第十四冊は全三七葉。半葉九行・行一八字。また半葉一〇行・行一八字。さらに半葉一一行・行一五字。全冊、朝鮮書からの引用。

第十五冊は全九七葉。半葉一〇行・行一九字。「東国通鑑抜萃」と副題があり、むろん朝鮮書からのぬきがき。たとえば、その冒頭の記事をしめすと、

日本崇神天皇四十八年辛未
前漢昭帝甘露四年
新羅始祖八年　始祖朴赫居世
倭来寇辺、聞王有神徳乃還。

のごとくである。もう一例をしめすと、

日本神功皇后八年戊子
後漢献帝建安十三年
新羅奈解王十三年
高句麗山上王十二年
百済肖古王四十三年
夏四月、倭侵新羅、遣利音将兵拒之。

のような認識にたっている。なお巻末に、つぎのような林恕のあとがきのあることを注目しておきたい。

去歳之冬、抄出東国通鑑載　我邦之事／者、以為冊子。然元本有脱落、不詳始末。此／冊或人以全本抄出之者也。然猶未全／備。他後借全書元本、相互考正而可也。

乙巳季春　　林学士

「乙巳」は寛文五年＝康熙四年（一六六五）と推測される。「林学士」とは林恕のこと。

第十六冊は全三二葉。この冊にかぎり、有枠、無罫。半葉九行・行一九字。また「浅草文庫」の押印の下に、たて五字「弘文学士館」の押印がある。全文に句読・返点・送りがなをつけ、上欄外には、篇海曰……統譜曰……韻会曰

……玉篇曰……などの註記がある。

第十七冊は全八〇葉。半葉一〇行・行一九字。

第十八冊は全三四葉。半葉八行・行一七字。また半葉九行・行一八字ないし一九字。さらに半葉一〇行・行一八字ないし二〇字。むろん、書体も異なる。引書ごとにもちより、編集したものらしい。

第十九冊は全二九葉。半葉一〇行・行一九字ないし二〇字。

第二十冊は全七一葉。半葉八行・行二二字ないし二〇字、一九字、一七字、一六字。また半葉一〇行・行一九字ないし二〇字。さらに半葉九行・行一八字。

第二十一冊は全六五葉。半葉九行・行一八字ないし二〇字、一九字。本冊は巻首に、つぎのような解説をしるしているのが特色。

一按猷徴禄（録）所載之日本志三篇、其二篇王世貞・葉向高所記也。其一篇脱姓氏。皆起洪武、到嘉靖三十五七年間矣。大率叙倭寇、而其文雖異、只互詳略而已。考之從信録・憲章録、則亦有詳略。然歳月儘有同異。宜考之。

一武備志日本考全篇、用葉向高日本志、就中文有先后者、有審熈者、且至隆慶・万暦間、粗叙信長・秀吉之事。於其攻三韓者、付之朝鮮考。

一朝鮮考篇首述其王系、至終悉誌秀吉討韓之始末、与從從（信）録所記大同少異。然年序不備、併考之可也。

第二十二冊は全三一葉。半葉一〇行・行一九字。

第二十三冊は全三一葉。半葉九行・行一八字。また半葉一〇行・行二〇字。さらに半葉八行・行一七字。全冊、朝鮮書からの引用。

三　国史外考の引用書（上）

前述のように、第一・二冊は、いうなれば日明交渉編年史のような体裁で、典拠と参考文献を併記している。したがって、本節では、その両者をいちおう引用書とみなして、引用の順序にしたがい、中国書・朝鮮書・日本書にわけて、列記しておく（再引・三引などをふくむ。カッコ内は石原の加筆）。

A　中国書　二十三種

1〔皇明〕従信録　2明政統宗　3〔高皇帝〕御製文集
4翦勝野聞　5堯山堂外記　6〔両朝〕憲章録
7〔国朝〕献徴録　8葉向高・日本志　9武備志
10図書編　11東西洋考　12続文献通考
13閩書　14薛氏・日本考略　15王世貞・日本志
16続蔵書　17広東志　18瓊臺類稿（以上、第一冊）
19神応経　20弇州四部稿　21〔万暦〕三大征考
22学古適用編　23許敬菴集（以上、第二冊）

B　朝鮮書　九（八）種

1鄭圃隠集　2牧隠文稿　3陶隠詩集
4筆苑雑記　5陽村文集　6牧隠詩稿
7東国輿地勝覧（以上、第一冊）　8佔畢斉集　9老圃堂集（以上、第二冊）

C　日本書　四種

1義滿譜　　2義持譜（以上、第一冊）　　3義教譜

4義政譜（以上、第二冊）

つまり、第一・二冊をつうじて、中国書二十三種、朝鮮書九種（牧隠文稿・牧隠詩稿を一種にかぞえれば八種）、日本書四種を引用している。以上、諸書のなかで、とくにきのついたことは、わたくしの従来の諸研究と関連したものとして、A—18にみえる「万里一帰人巻」の記事、C—3にみえる麴祥の記事、そしてA—21 22のいわゆる「秀吉討韓顚末」についてA—1 21 22 9 11 10 2 12の八種を特記していることであった。

四　国史外考の引用書（下）

第三冊以下は、第一・第二冊とまったく形式がかわり、中国・朝鮮諸書の原文を集録する。各冊別の引用書とその巻数などをしるせば、つぎのとおり。第四・八・一三・一四・一五・二三冊は朝鮮書（ナンバーは第一・二冊からの通し番号。ゴチックは重出。カッコ内は石原の加筆）。

A　中国書　八十六（八十八）種

24漢書、地理志下　　25後漢書、巻七五、倭
26魏志、巻三〇、倭人　　27晋書、列伝六七、倭人
28宋書、列伝五七、倭国　　29南斉書、列伝三九、倭国
30梁書、列伝四八、倭　　31南史、〔列〕伝六六、倭国
32北史、列伝八二、倭国　　33隋書、列伝四六、俀（倭）国

34旧唐書、〔巻〕一四九上、倭国・日本
35唐書、巻三二〇、日本
36温公通鑑（資治通鑑）、巻二〇〇、巻二〇一
35唐書、列伝一四四、百済伝
34旧唐書、列伝三四、劉仁軌伝
37冊府元亀、巻九五六、倭人・日本。巻九五七、馬韓。巻九五九、倭国・倭奴国・日本国。巻九六二、巻九六三、巻九七一、巻九七二、巻九七四。巻九九七（又見太平広記、巻二二八）
38太平広記、巻二二七、伎巧部（出杜陽編）
39杜陽〔雑〕編（以上、第三冊）
13閩書、巻一四六、島夷志
38太平広記、巻二二七、韓志和（重出）。巻二二八、日本王子（37巻九九七、参看）（以上、第五冊）
3〔高皇帝〕御製文集、巻二、諭日本国王詔。巻一六、巻一九・倭扇行。
40鳳池吟稿、巻七、題日本畫扇応制（二首）
41景濂集、巻三三
42宋学士文集、巻二七、巻三三、巻三七、巻四〇
43一枝堂、厳烈女伝
44宏辞、巻一一、平倭頌有序
45唐荊川集、巻三、巻二、巻五
46癸辛雑識後集（以上、第六冊）
7〔国朝〕献徴録、巻一一、巻一七、巻二一、巻二七、巻三九、巻五七、巻五八、巻六七、巻七一、巻八六、巻一一二、巻二一三。巻一〇六、巻一〇七（以上、第七冊）
1皇明従信録、日本考、付（6憲章録・両朝憲章録）巻四、巻五、巻六、巻七、巻八、巻九、巻一三、巻一四
47大学衍義補
48南宮疎略（以上、第九冊）
49古文世編、巻七三
50唐王右丞（王維）詩、巻五

51 中唐十二家儲光羲集
52 唐詩品彙、巻一六、巻六九
53 曲江集、巻一二
54 唐詩類苑、巻一四七、巻一四九。巻一一七、巻一一八
55 文苑英華、巻二一九、巻二二一、巻二二三、巻二二四、巻二七一、巻二八〇、巻二九六、巻二九七
56 石倉詩選・元成原常集、巻一七、巻四六、巻七七、巻八三、巻九五
57 同　次集、巻一二、巻一八、巻一三二、巻一二六
58 呉淵穎集、巻一・東夷倭人小摺畳畫扇子歌。巻五、論倭。
59 楊慈湖遺集、巻一一、日本国僧俊芿求書（以上、第十冊）
60 蒼霞草、巻五、巻一〇、巻一六、巻一九（朝鮮考・日本考）
61 蒼霞続草、巻一一、巻一五（以上、第十一冊）

11 東西洋考、巻六、日本
10 図書編、巻五〇、日本、計処倭酋
2 明政統宗付巻、日本顚末。明政統宗、巻二、巻四、巻七、巻一五、巻二七
22 学古適用編、巻五〇（以上、第十二冊）
21 万暦三大征考、倭上下（以上、第十六冊）
62 文献通考、巻三二四、倭即日本、日本
12 続文献通考、巻二三四、高麗。巻二三五、琉球。（以上、第十七冊）
14 薛氏日本考略、国朝貢変略
63 夢観集、巻一
64 蘿山集、巻四（日東曲十首・贈日本僧）
42 宋学士全（文）集、巻一五（日本硯銘）
65 唐詩帰、巻二四
66 孤樹裒談、巻二（倭国風俗詩）
17 広東〔通〕志、巻七〇、巻七二
18 瓊臺類稿、巻四七

4 翦勝野聞（倭国求通表文）
5 堯山堂外紀
19 神応経
13 閩書、巻一四六
67 甲乙剰言
68 屏風雪舟揚公所画秋（跋）
69 薪里苑（茆）屋図詩（以上、第十八冊）
16 続蔵書、巻二（宋景濂伝・李善長伝）、巻九、巻一一、巻一四（兪大猷伝）、巻二四（麴祥）
70 王緱山集、巻六（皇明禦倭録序）
71 野紀矇捜、巻一一、巻一二
72 歇菴集、巻三
20 弇州四部稿、巻七、倭志・黄公（訓）基誌銘
48 南宮疎略、巻八（以上、第十九冊）
73 宋史、列伝二五〇、日本
74 皇朝類苑、巻四三、日本僧（寂照、見楊文公談苑）。巻六〇、日本扇。巻六三（湘山野録）。巻七八、日本
75 談　苑
76 湘山野録
77 欧陽永叔（修）文集、日本刀歌
78 鶴林玉露、丙集四、日本国僧（安覚）
79 書史会要、巻八
80 月令広義（国人唱和詩）
81 宣和画譜、巻一二（日本画）
82 仏祖統紀、巻一二、巻一三、巻一七、巻二四、巻三〇、巻四〇、巻四一、巻四二、巻四三、巻四四、巻四五、巻四八、巻四九、巻五〇、巻五三、巻五四。巻四三（前出と別、以下同じ）、巻四四、巻四五、巻四六、巻四九。

83遼史、巻二、巻二五　84金史、巻一五
85元史、帝紀（世祖・成宗・晋王・文宗）。外夷伝、巻九五、日本
86心史（元韃攻日本敗北歌并序、大義略）　87続〔資治通鑑〕綱目、巻二三、巻二四（以上、第二十冊）
15〔国朝〕献徴録、巻一二〇、日本志（王世貞）
7同、日本志（逸名）　8同、日本志（葉向高）
9武備志、巻二三〇〔日本考〕。巻二三九、朝鮮考（以上、第二十一冊）
23敬許庵集（請諭処番酋疏、題琉球冊封疏、請計処倭酋疏、禁止私販倭船行各道……）（以上、第二十二冊）

B　朝鮮書　十九種

10慕斎詩集（朝鮮金安国、字国卿、号慕斎）、巻一、巻二、巻六
11慕斎文集、巻三、巻四（以上、第四冊）　12攷事撮要
13圃隱先生行状（高麗鄭夢周、字達可、号圃隱）
14圃隱詩稿、巻上、巻下
2牧隱文稿（朝鮮李穡、字潁叔、号牧隱）、巻三、巻九、巻二〇
6牧隱詩稿、巻一、巻四、巻六、巻八、巻一一、巻一二、巻二六、巻二八、巻三一
3陶隱先生詩集（高麗李子安、号陶隱）、巻二、巻三、巻五
9老圃堂集（朝鮮柳洵、字希明、号老圃堂、謚文僖）、巻五、巻六、巻一三
15晦斎集（朝鮮李彦迪、字復古、号晦斎、紫溪翁、謚文元公）、巻三
16武陵雑稿、巻五、巻六　17東文粋、巻六

18河西集（朝鮮金麟厚、字厚之、詩文河西集十五巻）、巻九

4筆苑雑記、巻一（以上、第八冊）　19晋山世稿、巻二、巻四、巻一（以上、第十冊）

7東国輿地勝覧、巻三、巻六、巻七、巻一二、巻一四、巻一五、巻一八、巻一九、巻二〇、巻二一、巻二二、巻二三、巻二四、巻二五、巻二六、巻二七、巻二八、巻三一、巻三二、巻三三、巻三四、巻三五、巻三九、巻四〇、巻四三、巻四八、巻四九、巻五二。巻二九、巻三〇（以上、第十三冊）

20東国通鑑、巻一七、巻三四、巻三五、巻三六、巻三七、巻三八、巻三九、巻四五、巻四九、巻五〇（以上、第十四冊）

20東国通鑑抜萃（林恕が試みたもの）（以上、第十五冊）

5陽村文集、巻一七、巻二、巻三四（東国史略論）、巻三五

7佔畢斎文集、巻一、巻四、巻六、巻八、巻一四（以上、第二十三冊）

引用書のかぞえかたについては、多少異論もあろうが、**A**中国書は、第一・二冊では二十三種、第三冊以下にかぎれば八十六（八）種。通計して重複するものをのぞけば、全二十三冊で八十八種である。**B**朝鮮書は、第一・二冊では九種、第三冊以下にかぎれば十九種。通計して重複するものをのぞけば、全二十三冊で二十種である。

五　小　結

以上、内閣文庫蔵の稀書、林恕の国史外考二十三冊の体裁と引用書を中心にのべた。第一・二冊は、日明交渉通史ともいえるもので、出典と参考文献・按文などを併記したきわめて学術的な編集。第三冊以下は、中国書・朝鮮書から日本関係記事を丹念に抄録したもので、中国および朝鮮の日本観、日本認識、日本研究をしるうえに、すこぶる有

用である。

第1表

冊次	葉　数
1	59
2	132
3	62
4	61
5	19
6	57
7	65
8	47
9	57
*10	28
11	44
12	57
13	20
14	37
15	97
16	32
17	80
18	34
19	29
20	71
21	65
22	31
23	31
計	1215

第一表は、各冊と葉数の関係をしめす。全二十三冊、計一二一五葉。一冊平均五三葉弱。ゴチックは全冊朝鮮書、六冊二九三葉。＊印は一部朝鮮書（第二・第三表もおなじ）。

第二表は、各冊と筆写半葉行字の関係をしめす。半葉一〇行・行一九字が多く、ついで八行・行一七字、九行・行一八字がつづく。一冊中、書写形式がまちまちなのは、やはり書体もちがつており、すなわち、二〜五名で分担筆写したことがわかる。第二十冊の八名とおぼしきものなど、その最たるもの。下欄の計1とあるのが、正常な写本のかたち。

第三表は、各冊と引用書の関係をしめす。

筆写の書体がまちまちだったり、まま誤写とおぼしきものもあり、また、引用書のやや不正確・不詳のものもないではない。時代別や巻数別の配列も、かならずしも十分とはいえない。しかし、当時として、これだけの中国書・朝鮮書のなかから、日本関係記事を丹念に集録した勤労は、まことに多大である。本稿では、その内容の一部にふれるにとどまったが、わたくしにとって、珍重すべき資料もすくない。精深な内容の検討とともに、引用書も、他の諸書と比較しながら、いずれ時代別に、総合的な整理をするつもりである。

第2表

行字＼冊次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	*10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	計
8—16			○			○		○			○									○				5
17			○					○		○	○	○						○		○			○	8
18				○														○						2
19											○							○		○				3
20																				○				1
22												○								○				2
9—18												○	○	○						○	○		○	6
19																○					○			2
20										○											○			2
10—17	○	○							○															3
18			○									○		○				○						4
19			○	○	○	○	○	○		○	○	○			○		○		○	○		○		14
20																		○	○	○			○	4
11—15														○										1
計	1	1	4	2	1	2	1	3	1	3	4	5	1	3	1	1	1	5	2	8	3	1	3	

第3表

書＼冊	中国	朝鮮	日本
1	18	7	2
2	5	2	2
計	23	9	4
3	16		
4		2	
5	1		
6	8		
7	1		
8		12	
9	3		
*10	11	1	
11	2		
12	4		
13		1	
14		1	
15		1	
16	1		
17	2		
18	14		
19	5		
20	15		
21	2(2)		
22	1		
23		2	
計	86(88)	20	

第二　内閣文庫蔵の本朝外考について

内閣本の国史外考と本朝外考は、書名が類似しているので、両者の内容を比較調査することは、かねてからわたくしの宿願であった。前章に準じて、本朝外考の体裁と引用書について、順次のべてゆくこととする。

一　本朝外考の体裁

内閣文庫蔵の稀書、本朝外考全五冊は、鈴木長頼等編、徳川昭武蔵の転写本である（註8）。線装、袋綴、美濃判。各冊、巻首の右上と巻末の左上に、二字三行「日本政府図書」の押印。以下、各冊の体裁をのべてゆこう。

第一冊は全九二葉。半葉八行・行一六字。引用書は、中国書の群書備考以下の七種（引用書については後述。以下おなじ）。巻末に「明治十五年十月一日、華族徳川昭武蔵書ヲ写ス、三級写字生井汲壮士郎」とあり、そのあとに「明治十五年十月二十日、八等掌記名倉信敦校」の自署がある。

第二冊は全一〇二葉。半葉八行・行一六字。引用書は、日本風土記以下の三十七（八）種。巻末に、つぎのような注目すべきあとがきがある。

本朝外考者、鈴木長兵衛長頼之所編集也。当／時長頼所輯凡十巻。今参校彰考館所蔵国史／外考及日本異称伝、除其已載者、／採其所無者、抄録以為五冊。／元禄七年甲戌十二月日

本朝外考は撰者不詳、というのがより正確かもしれないが、わたくしがあえて「鈴木長頼等編」とするのは、このあとがきにもとづく。彰考館本の国史外考と日本異称（異称日本？）伝を参校して、それに収載されていないものを抄録したという。元禄七年＝康熙三十三年（一六九四）十二月、編集を完了したとみられる。

第三冊は全六四葉。半葉八行・行一六字。引用書は、中国書の吾学編以下の八（五）種。巻末に「明治十五年八月三日、華族徳川昭武蔵書ヲ写ス、三級写字生赤木賢則」とあり、そのあとに「同年十月十日、八等掌記名倉信敦校」の自署がある。

第四冊は全八九葉。半葉八行・行一六字、また半葉一〇行・行二〇字。引用書は、中国書の続文献通考一種だけ。

巻末に「明治十五年十二月一日、華族徳川昭武蔵書ヲ写ス、三級写字生山中政篤」とあり、そのあとに「明治十六年六月十三日、八等掌記名倉信敦校」の自署がある。

第五冊は全一一七葉。半葉八行・行一六字。引用書は、中国書の国朝典彙一種だけ。巻末に「明治十五年十月一日、華族徳川昭武蔵書ヲ写ス、三級写字生井汲壮士郎」とあり、そのあとに「明治十五年十月五日、八等掌記名倉信敦校」の自署がある。

二　本朝外考の引用書（一）

前節でふれた第一―第五冊の引用書の内容を、つぎに具体的に紹介する。

第一冊は、中国書七種、すなわち

1 群書備考（逍田逸農了几袁黄坤儀甫著・男袁儼若思甫註釈）、巻六、備倭

2 策学考実、倭夷考、倭夷釈

3 四夷攷経国雄略（温陵鄭大郁孟周編訂・南安鄭国揚玄明・皇恩姚宗鎮弥宗参閲）、巻二、日本

4 蓬窓日録寰宇、巻二、日本考略

5 陳眉公・日本考

6 東西洋考、巻六、日本

7 学古適用編（松陵呂純如孟階）、巻五〇

第二冊は、はじめに全浙兵〔制〕目録をのせ（註9）、つづいて付、日本風土記目録として

第一巻　日本国図　倭国事略　畿内部　駅　戸　課　島名　*寄語島名　*倭船　*倭好　*寇術　*倭刀

第二巻　沿革　疆域　幾州郡島　国王建都　属国　*山川　土産　国王世伝　所属戸口　朝貢　*貢物　貢船開泊　君臣礼節　*設官分職　*染牙　内俗　徴粮　法度　官出巡　*風俗男子　*婦人　婚姻　便宜婚姻　生育　喪事

祭祀　貿易　＊時令　＊侍（待）・賓飲饌　出海通番　商船所聚　居室　公文　三教　九流　＊百工器械　＊娼優
隷卒

第三巻　字書　以路法字様　歌謡—岩衣山帯　松風攪睡　秋田暁露　鹿悲紅葉　冬花春発　年内立春　新歳挙筆
春雲引志　難中春怨　春風過嶺　憶摘桜〔桃〕　摘花遇雨　樵子偸桃　春野採花　雲迷夏月　松影罩山　指月候
人　雲山苔石　皓月逢人　月下雁・帰（帰雁）　王（玉）・霜問婦　世笑梅獣　倩人摘梅　日月同天　蜒蜒避牛　心
命相連　托月臂病　帰遅嘆世　夜月感懐　相期不候　夜約悞期　択善相交　浪裏行舟　京郷辨智　漁舟速約　世
別清渾　武蔵無山　暴雨臂瘡　涙筆写情

第四巻　語音—＊天文　＊時令　＊寒温　＊暁夜　＊月分　日数　＊今明　五行　十干　十二支　甲子　地里　火
炭　宮室　＊城市　国部　方向　＊人物　＊君臣　＊吏従　軍民　＊教流　＊工芸　＊流賤　＊篤廃　＊親属
＊称答　＊身体　＊衣服　＊鋪盖　＊段布　＊顔色　五穀　＊飲食　＊炊煮　数目　算法　＊器用　＊内器
〔＊匠器〕　＊農具　＊船具　＊馬具　文具・（器）　＊武具　＊响器　香料　＊医用　＊珍宝　花木　＊菓子
菜蔬　野草　鳥獣　＊人事〔類〕

第五巻　文辞——東大寺大朝法斎大師肴然啓　戒厳王思行成表　詩賦——詠西湖　又詠西湖　春日感懐　奉迎将
答風俗問　普福迷失楽清被獲感懐　題春雪　萍　保叔塔　被張太守禁舟中嘆懐　遊育王　四友亭　題花鳥画　鳩
鵲争鳴　山歌——日春清水寺　夫婦妻接　月夜私情　少女別郎　青春嘆世　美女懐郎　雑唱小曲　夜懐故交　祝
延聖寿　女嘆配遅　琴法——琴様　琴譜——憶中華調　又廻文詞　棊格——象基・（棊）　棊子造法　棊子歩法
棊盤式様　囲棋・（碁）　雙陸　〔征行所禁　纂法　捷法〕

としるす。ところが、じっさいの本文をみると、それぞれ日本風土記巻一抄、巻二抄、巻四抄として、前記目録中の

＊印だけを抄録するにすぎない。巻三と巻五には「抄」の字がなく、巻三は全文、巻五はおわりの〔　〕内の三項をのぞく全文が引用されている（註10）。

日本風土記につづく中国書の引用は、詩・語句・説話などである。つぎに、これを列記してみよう（ナンバーは第一冊からの通し番号）。

8 日本風土記　9 李杜全集　10 唐詩類苑
11 王氏談録　12 石倉十二代元詩選　13 皇明列朝詩集
14 明詩帰　15 晋安風雅　16 適情録
17 皇明文微・（徴）　18 六学僧伝　19 夷俗考
20 譜雙　21 蓬窓続録　〔22 春風堂漫筆〕
23 戒菴漫筆　24 湘山録　25 宣和畫譜
26 山堂肆考　27 文昌雑録　28 唐国史補
29 癸辛雑識　30 月令広義　31 五雑組・（俎）
32 清異録　33 南唐書　34 唐会要
35 唐宋遺文　36 畫史　37 説郛続
38 造邦賢勲録略　39 泊宅編　40 説郛
41 遵生八牋　42 説海　43 泉志
44 何将軍兵録　45 玉海

因みに、10 皇明文微・は、むろん徴の誤写であろう。22 春風堂漫筆は、21 蓬窓続録の引用のあとの割註にみえるも

の。以上、第二冊の三十八種の内容については、わたくしがすでに検討発表ずみのものもあれば、未発表のものもある。いずれ別稿にゆだねたいが、戒厳王思行成長（8日本風土記・巻五・文辞）と答風俗問（同・詩賦）に、ひとことふれておく（註11）。

三　本朝外考の引用書（二）

第三冊は、中国書八（五）種。すなわち

46吾学編、巻二二、皇明四夷考（海塩鄭暁）、日本　47歴代史纂左編、巻一一八、日本

48海防纂要（黎陽王在晋明初甫纂・男会苾穉蒭甫較閲）、巻三、日本

49〔広輿記〕　50〔文献通考〕

51〔籌海図編〕　52備倭事略（呉郡帰有光）

53広東通志、倭夷、海寇付

第四冊は、中国書一種だけ。すなわち

54続文献通考（皇明進士雲間王圻纂）、巻二三四、四裔考・東夷・日本、市舶互市、土貢考常貢

本冊で注目されるのは、おわりに「国史外考」として、つぎの諸書を列記していることである。なんの説明も註記もないので、詳かでないが、おそらく、わたくしが前章で調査した林恕編の国史外考（彰考館本か）の引用書をかいたものにちがいあるまい（註12）。したがって、本朝外考は、国史外考編集後の撰であることは、この点からもたしかである（カッコ内の番号は、第一章でのべた内閣本国史外考所引のAにつけたもの）。

1薛氏日本考略（14）　2夢観集（63）　3蘿山集（64）

4 宋学士全集（42）　5 孤樹裒談（66）　6 広東志（17）
7 翦勝野聞（4）　8 堯山堂外紀・（5）　9 神応経（19）
10 閩書（13）　11 甲乙剩言（67）　12 雪舟屏風跋（68）
13 薪里茆・（苑）屋図詩　14 古文世稿（49）　15 王右亟集（50）
16 唐詩品彙（52）　17 曲江集（53）　18 唐詩類苑（54）
19 文花・（苑）英華（55）　20 石倉詩選（56）　21 呉渕穎集（58）
22 晋山世稿（B—11）　23 楊慈湖遺集（59）　24 〔高皇帝〕御製文集（3）
25 宋景濂集（41）　26 宏辞（44）　27 癸辛雑識（46）
〔8 堯山堂外記・—重出・誤入か〕　*28 朕車志　*29 誠意伯集
30 一枝堂（43）　31 荊川集（45）　*32 李文節集
*33 五雑俎　〔34 歴史日本伝〕34 唐書（35）　35 宋史（73）
36 南史（31）　37 北史（32）　38 梁書（30）

右のうち、8 堯山堂外紀（記）は重出、おそらく誤入とおもうので一種とした。12 雪舟屏風跋は屏風雪舟揚公所画秋（跋）とあるもの、13 茆・屋は苑屋とみえる。19 文花・英華はむろん文苑の誤写であろう。22 晋山世稿はただ一つの朝鮮書。（B—11）としたのはそのため。28 29 32 33 は、このままの書名としては、該当するものが見出だせない。34 歴史日本伝に〔 〕をつけ、34 唐書……としたのは、歴史日本伝を一種とかぞえるより、唐書以下を別々にかぞえる方が、より妥当と判断したからである。歴史日本伝のいみは、中国歴代日本伝、ないし中国正史日本伝をさす。以上、国史外考の引用書三十八（三十四）種（うち朝鮮書一）をあげているのである。因みに、前章でわたくしが国史外考

（内閣本）を調査した結果といろいろ出入があることは、見られるとおりである。

第五冊は、中国書一種だけ。すなわち

55国朝典彙（都察院右僉都御史臣徐学聚編集・広西道監察御史臣趙胤昌訂正）、兵部三三、日本

四　小　結

以上のべたところを要約すると、つぎのようになるであろう。

本朝外考は、はじめ鈴木長頼らが編集した十巻本であったが、元禄七年（一六九四）十二月に、国史外考・日本異称（異称日本？）伝などにないものを補録して五冊本にした。現在の内閣文庫の五冊本は、徳川昭武蔵本を、明治十五年八月から十二月までに、三級写字生井汲壮士郎・内海広順・赤木賢則・山中政篤の四名が転写し、同年九月から翌十六年六月までに、八等掌記名倉信敦が校閲したもの。第四表の左欄は、各冊の葉数・行字および引用書の関係をしめす。全五冊・計四六四葉（一冊平均九三葉弱）、半葉八行・行一六字に統一され（第四冊一部の一〇行・二〇字は例外）、引用書は中国書五五（五一）種。写字生四名をもちい、とくに校閲者をもうけ、その書写および校閲の年月日を、各冊のすえに明記させているくらいであるから、慎重丁寧、きわめて計画的に転写されたにちがいない。字体もきれいだし、半葉八行・行一六字に統一されているのも、むしろ当然であろう。ただし、第四表の右欄から推測されることは、いま、内閣文庫架号の冊次**12345**の順序は、転写の年月日順からいえば**42153**となり、校閲の年月日順からいえば**41352**となる。わたくしは、校閲者が、校閲の順序を、かならずしも転写完了の順序にしたがっていないところから判断して、ここにあらわれた校閲順序**41352**こそが、現在みる冊次**12345**にとってかわるべき妥当な冊次であろう、と考えている。

因みに、本稿につづく各論第二・第三・第四として、「日本外志の写本四種について」「補異称日本伝と異称日本伝補遺について」「続異称日本伝四種について」を用意している。

第4表

冊	葉数	行・字	引書	写字生	写転順	写年月日	校年月日	校閲順	校閲者
1	92	8—16	7	井汲壮士郎	4	M15. 10. 1	M15. 10. 20	4	名倉信敦
2	102	8—16	38(37)	内海　広順	2	M15. 9. 10	M15. 9. 28	1	〃
3	64	8—16	8(5)	赤木　賢則	1	M15. 8. 3	M15. 10. 10	3	〃
4	89	8—16 10—20	1	山中　政篤	5	M15. 12. 1	M16. 6. 13	5	〃
5	117	8—16	1	井汲壮士郎	3	M15. 10. 5	M15. 10. 5	2	〃
計	464		55(51)						

補　註

(1) わたくしに助成された文部省科学研究費（各個研究）による「異称日本伝の類書・続編の研究」の報告第三にあたる。報告第一・第二はつぎのとおり。石原道博、中国史書日本関係記事の集録について、山崎先生退官記念東洋史学論集、一九六七年一二月。同、朝鮮史書日本関係記事の集録について、朝鮮学報四八、高橋亨博士追悼記念、一九六八年七月。

(2) 内閣文庫蔵、国史外考の架号は、林二三・特六七・四

(3) このあと、恵帝建文四年をはぶく。

(4) このあと、仁宗洪熙元年、宣宗宣徳十年をはぶく。

(5) このあと、代宗景泰七年、英宗天順八年をはぶく。

(6) このあと、孝宗弘治十八年をはぶく。

(7) このあと、穆宗隆慶六年をはぶく。

(8) 内閣文庫蔵、本朝外考の架号は、五・一八四・一八七

(9) 全浙兵目録とあるが、おそらく全浙兵〔制〕、ないし全浙兵〔制考〕の誤脱とおもわれる。その目録は、つぎのとおり。

（第一巻）全浙海図・海図総説・水陸兵制、杭嘉湖区図・杭嘉湖区図記・（説）・杭嘉湖兵制・衛所烽堠・本区倭乱紀、寧紹区図・寧紹区図説・寧紹兵制・衛所烽堠・本区倭乱紀。（第二巻）台金厳区図・台金厳図説・台金厳兵制・衛所烽堠・本区倭乱紀、温処区図・温処区図説・温処兵制・衛所烽堠

・本区倭乱紀。付録、近報倭警。（第三巻）造修福船略説、付、纂造新修旧大小福鳥船料数。

(10) 日本風土記の目録と本文をくらべて、誤脱ないし誤写とおもわれるところを指摘すると、本文では、第三巻歌謡の憶摘桜〔桃〕の桃が誤脱、月下帰雁が雁帰と転倒、玉霜問婦が王霜と誤写、また第四巻語音の内器のつぎに匠器があり、人事は人事〔類〕となり、第五巻棊格の象棊が基と誤写、囲碁は囲棋、またおわりの征行所禁・纂法・捷法の三項がない。はじめから意識的に省略するつもりなら、「日本風土記巻五抄」とかいたはずだから、この三項は省略ではなく、誤脱とみなされる。ただし、おわりちかくなって、にわかに三項を省略する気になり、「抄」の字をくわえぬまま、割愛したのかもしれない。

(11) 日本風土記・巻五・文辞（本朝外考、第二冊）にみえる戒厳王思行成表というのは、なだかい懐良親王（良懐）が明の太祖洪武帝におくった答書をさす。諸書により語句に異同がある。石原道博、いわゆる良懐の対明答書について、歴史研究三一、一九六四年三月。また同書・巻五・詩賦（本朝外考、第二冊）にみえる答風俗問というのは、「君問吾風俗、吾風俗最淳、衣冠唐制度、礼楽漢君臣、玉甕蔵新酒、金刀剖細鱗、年々二三月、桃李一般春」である。石原道博、日中交渉史雑考、茨大人文学部紀要、文学科論集二、一九六八年一二月。

(12) 彰考館本の国史外考を、「彰考館図書目録」（大正七年九月刊）に徴すると、巻二二・申部・外交類に、国史外攷、林学士家本写（三・四一・写）および国史外攷（三・四一・写）の二種がみえる（八一四頁）。「林学士家本写」の三冊らしいから、わたくしが紹介した内閣本二十三冊の一部転写とみなされる。この写本は両者とも、一九四五年の戦火によって焼失した。なお、焼失した関係図書に、異称日本伝、松下見林編、元禄戊辰九月（一五・四一・刊）二種、歴史日本伝（一・四一・写）、本朝外攷、鈴木長頼輯（五・四一・写）二種がある（同目録、八一四頁、参看）。